

原風景

いつもとかわらない景色。

その時の季節や天候で感情を顕にする。その樹はまるで意思があるかのように訴える。樹だけではない。目に映るもの全てが、まるで一つの生命のように。ただ何らかの意思だけを囁き、捲し立てる。原風景。それはその時の私の心情が映した虚像なのかもしれない。

泣きたいくらいに美しい。

いつもとかわらない景色。

違うのは私自身。

子供の記憶

雪を見てウキウキとした気持ちになる反面、覚えているのは静かな夜の景色。街灯が照らし出すオレンジ色に切り取られた空間には、ふわふわの雪が降っている。「雪が降る」という表現は少し違うかもしれない。小さな空気の動きによって下から上へも雪は舞う。近くをトラックが「シャンシャン」とチェーンの音を立てて走り去る。そんな景色を窓越

しに眺めていた。

私は元々プロダクトデザイナーとして東京で活動していました。その後、拠点を上海へと移し、気が付けば故郷である新潟での時間以上に時は過ぎていました。そこで経験した物作りの考え方と精神を、より突き詰めることが写真家へ転向するきっかけでした。日本、中国、台湾。撮影でこれまでに300箇所以上の職人・作家を訪れたのでしょうか。伝統工芸とは人と、その土地・風土とのコミュニケーションから生まれた物であるように、生まれ育った自然が彼らを育んだのでしょうか。各地を周り沢山の方々から学ばせて頂く事で今の私は形作られました。その核たる部分は彼らのように自分の内側にあるのだと教えられました。

現在は新潟に拠点を移し、相変わらず全国を飛び回っています。一人で歩くのは気軽なものです。ゆっくりと時々小走りに。道からそれてみたり、気ままにどこへでも向かえま

す。多少の向かい風すら心地良い。
ふと、こんな生き方は普通ではない
特別な事なのだなと思ってしまいま
す。子供の頃の私が、あの時何を思
っていたのか。職人・作家の本質が
故郷の風景にあるならば、私の本質
もあの頃の夜に繋がっているのでし
よう。

故郷の雪景色。それを見ることがで
自分の発見と探究をすることが出来
るのです。

2019.10.03 星野裕也